

2014.11.22



“ニ短調の世界” — ニ短調の名曲を探る



プログラム

“調性”を特集するシリーズの第4回目は、ニ短調で書かれた名曲を集めてお聴きいただきます。

ラロのスペイン交響曲は、交響曲と題されているものの、ヴァイオリンの鬼才サラサーテのために書かれたヴァイオリン協奏曲です。スペイン情緒たっぷりの旋律、濃厚な色彩と情熱に溢れた名曲です。ブラームスのピアノ協奏曲第1番は、25歳時に書かれた初期の作品ですが、時にピアノ助奏付き交響曲と言われるように、ピアノを華麗なソロ楽器として扱うのではなく、重厚で分厚い管弦楽と対話させながらも、ピアノ協奏曲としての魅力を十分に生かし、若き青春の情熱のほとばしりが見事に表現された傑作です。ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第17番「テンペスト」は、弟子のシンドラーが曲の内容について質問した時に、“シェイクスピアのテンペストを読みなさい”と答えたことからその名が付けられたと言われていています。随所に嵐（テンペスト）のような効果的な曲調を演出しています。中期の名曲のひとつ。マーラーの交響曲第3番は、マーラーがアルプスのふもとにあるシュタインバッハという村に立てこもって書いた作品で、圧倒的な自然の風景に靈感を得て作曲されたと言われていています。生命が誕生していない自然から、動植物、人間を経て天国的な世界へ至るまでを6つの楽章で表現しています。全曲は1時間30分強を要する大曲で、マーラーの最高傑作と呼んでも良い作品です。特に最終楽章はあらゆるシンフォニーの中でも最も美しく感動的な楽曲のひとつに数えられる名楽章です。

今日はニ短調の名曲をたっぷりお聴きください。

エドゥアール・ラロ (1823~1892):

スペイン交響曲ニ短調op.21 ~第1楽章、第5楽章

ジャン・ジャック・カントロフ (ヴァイオリン)

セルジュ・ボド指揮NHK交響楽団

(1982.1.27 NHKホールでのLive)

ヨハネス・ブラームス (1833~1897):

ピアノ協奏曲第1番ニ短調op.15 ~第1楽章、第3楽章から

クリスティアン・ツイメルマン (ピアノ)

小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1986.6.27 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

ピアノ・ソナタ第17番ニ短調op.31-2 “テンペスト”

~第1楽章、第3楽章

ブルーノ・レオナルド・ゲルバー (ピアノ)

(1990.3.13 オーチャードホールでのLive)

グスタフ・マーラー (1860~1911):

交響曲第3番ニ短調 ~第1楽章から、第6楽章

ジェームズ・レヴァイン指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(1990.2.18 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)